

氏名	松尾 阿有子
ヨミガナ	マツオ アユコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第558号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 自意識とポートレート 〈作品〉 あなたとわたし 十二単 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 理策
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（副査）	多摩美術大学	准教授	（美術学部）	佐々木 成明
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文は様々な属性や身体性から解放された「ゼロの自分」としての自意識をどのようにして写し取るかを中心に制作を行ってきた筆者の作品における、自意識の形成とセルフポートレートという手法との相関関係を探るものである。論文は5章構成になっており、以下にそれぞれの章の概要を述べる。

1章では他者との関係や環境の中で揺れ動く自意識の問題を捉えるため平野啓一郎の提唱した分人主義の概念を引き、それに影響を受けて筆者が設定した先天的自意識と後天的自意識という自意識の2つの形態について考察する。セルフポートレートはカメラやスマートフォンアプリ、ソフトの技術向上によって、個人が後天的自意識を表現する方法としてコントロールのしやすいものになった。日常生活の中でその発展の影響を受けたことで筆者自身が描く自己イメージもより自由度が増し、解像度を上げていった。先天的自意識が仮に「唯一無二であるが、ゼロの状態である魂のようなもの」とするならば、後天的自意識は、先天的自意識という種(タネ)に、環境や他人による影響、社会的属性といったものを与えて生まれた自意識であり、この後天的自意識が平野啓一郎の提唱する「分人」と見なさうだろう。対象とする自作品は写真集『ポートレート・ポートレート』とその空間インスタレーションを中心に『セトテトラの記憶採集録』や『あなたとわたし』なども参照する。表現手段は様々であるが、筆者の一貫したテーマは自意識を写し取ることにあることをこの章で確認したい。

2章では現代における多様な性のあり方を論じ、性を言語化・概念化して語ることによる問題点を性別主義の観点から考える。その問題点を解消するため二者間の関係の中で浮かび上がるものとしての性の捉え方について考察する。写真を用いた表現により筆者と関わりの強い人物と互いに関係をつくりながらセルフポートレートを撮っていくことで、微細な性の曖昧さや可変性について再現・考察した『あなたとわたし』を中心とした自作品にも言及し、身体と性の関わりについて明らかにする。他者との関係を包括する性はその中で揺れ動く自意識との関係において重要な要素と考えるからである。

3章では自らの制作の原点となった作品『わたし、いくら、あなた』『いくら、そして彼女』『you』から近年に至る作品の流れをたどりながらよりテーマを浮き彫りにし、ニュートラルな始まりの位相であ

る「ゼロの自分」へ向かう自意識を写しとるための試作や実験的な試みをいくつか例示して述べる。

他者と自己との間に決定的な境界線が存在するのではなく、男女という2つの性の間にはグラデーションのような段階的な変化や違いがある。4章では性に言葉を与えて分割していく方法ではなく、「あなたとわたし」という、二者の関係性をそのまま包み込むようにとらえる考え方の提案としての作品『あなたとわたし』を再考する。男女という要素だけでなく、二項対立する空想と現実、精神と肉体、生と死、そして「あなた」と「わたし」をつなぐものをテーマとし模索した『あなたとわたしと世界』から境界の捉え方を言及する。

終章では4章までの議論を受け、最新作であり、博士提出作品である『十二単』を考察の対象とする。『十二単』は自意識を写し取ることによるアイデンティティの救済という問題意識に対しての現時点での解答であり、作品制作の中で属性や身体性以前の「ゼロの自分」として先天的自意識を自立させることができたと考えている。

本論文は「ゼロの自分」としての自意識を写し取るためにこれまで行ってきた思索や表現手法の集大成であり、その経過をたどってゆくと、「他者との関係性としての性」から「揺れ動く自意識としての後天的自意識」へ、さらに「それらの種(タネ)となるものとしての先天的自意識」へとより視点が内面化していったことが明確となった。セルフポートレート的手法を用いて属性や身体性以前の自分を認め、自己のアイデンティティを救出するひとつの方向を指し示すことができた。

(論文審査結果の要旨)

筆者は自己イメージとアイデンティティをめぐる問題を主題に、セルフポートレートを中心とする写真、立体、空間インスタレーション作品を制作してきた。社会的属性や他者との関係によってさまざまに変化する自意識を可視化することを目指すその作品は、アイデンティティとは何によって規定されるのかという問いを鑑賞者に示す。本論は、これまでの実作的試論を基盤として「自意識」と「ポートレート」の相関関係を探るものである。

外的な要因によって揺らぐ自意識を考える上で、筆者はまず、平野啓一郎の「分人主義」を参照する。そして、対人関係ごとに異なる自分(分人)が存在するという分人主義の考えを発展させ、あらゆる属性や身体性から解放された「ゼロの自分」としての先天的自意識と、そこに外的要因が作用することで分人化した後天的自意識を仮定する。対をなすこれら二つの自意識について自らのセルフポートレート作品と照らしながら考察していくが、その過程でいくつかの作品が内包する二項的要素(あなたとわたし、こちらとあちら、可視と不可視など)についても検証を行い、自己認識における重要なファクターとして生得的な性別と性自認の関係性に触れ、社会的要因や性別主義にしばられる以前の自意識のかたちを写真映像に表す試みについて解説している点が興味深い。

かつて写真のセルフポートレートは現実の肉体と自意識との差を含みながら結像するものであったが、修正加工機能が進化し続ける現代のデジタル写真では理想的な自写像を作成することが可能となった。筆者は現代におけるセルフポートレートを「自身の姿を思いのままに画像に定着させ、それを自己イメージとして他者に表明する」ための装置だと述べた上で、自らの作品におけるセルフポートレートは「自身を媒介に自己や他者を認識し、実体を持たない自意識を可視化する」装置と説明し、制作の趣意を明示する。後天的自意識としての自己イメージを作成し、多様に分化した自意識を写真の形で並列することによって先天的自意識(ゼロの自分)を浮かび上がらせる作品を解説する本論は、自意識から生まれたイメージが現実を規定し得ることを示すものであり、Instagram等のコミュニケーションツールで日々莫大な量のセルフイメージが無自覚的に行き交う状況において今日的な意味は大きい。以上の理由から博士号に値すると判断した。

(作品審査結果の要旨)

円井テトラは、「ポートレートと自意識」を中心に今まで数々の作品を作ってきた。

今回の展覧会会場には過去から継続して制作している、2人の女性（ひとりには作家自身）によるポートレートのシリーズ「あなたとわたし」と博士展作品であるインスタレーション作品「十二単」を並べて構成するという手法を作者は選択している。

2012年以降の数年間、継続して制作されている作品「あなたとわたし」では、作者と特別な関係にある他者（女性）との間で制作された写真作品で、間をおいて4回のシリーズで構成されている。それぞれは8点の組写真で構成されており、二人の姿はボーイッシュな男性と女性、あるいは少年と年上の女性、最新作ではそっくりな双子の姉妹に見えるような撮影がなされているが、それぞれのシリーズで、ウィッグやメイクがなだらかに交換されている。8枚の組写真の中で相互にその役割が微妙に変わっていくことで、その中間のグラデーショナル的性差の変化を組写真で見せていくという作品である。

このシリーズは男性と女性という単純化されたわかりやすい性意識にとどまらない「あなた」と「わたし」の間にのみ存在する淡い関係性とそれが変容可能なことを表現した作品なのだが、この作品を作る過程で作者に生まれた「対峙する相手や環境の変化によって、自分の自意識が自然かつ自由に変化していつている」という認識が、新作「十二単」を生み出している。「生まれたときからの自意識とは別に、『後天的自意識』としか呼べないような自意識の増殖があるのではないか？という発想が、インスタレーション作品「十二単」では、作家が「原初の自意識」と設定する白い浮遊する自己像がライトボックスの中で輝き、その光源を背景に、12種類の様相に変異したセルフポートレートがオーガンジーのような布にプリントされてインスタレーションを構成している。プリントされた等身大サイズの写真は、一見コスプレのようにも見えるが「キャラに扮装するコスプレ」とは違い、この像はおそらく作者の素の姿の、人との関係性の中に存在する自己像のバリエーション「分人」なのであろう。論文中では平野啓一郎の提唱する分人主義を引用しながらも、「ゼロとしての自意識」がその中心に存在するという補強を加え、「分人としての自分」も含めた新しいポートレートの像をインスタレーションという形式でまとめて、展開した作品を評価し、審査委員全員の承認の下に本作品を博士号に値すると認める。

（総合審査結果の要旨）

松尾阿有子の論文「自意識とポートレート」、及び博士展示作品の「十二単」（2017）と「ポートレート・ポートレイト」（2016）は、自意識を写しとることはどのようなアプローチとプロセスにより可能になるのか、という持続的な問いかけに貫かれている。

自意識という言葉は曖昧で多義的な意味を孕むが、ここでは「自分が自分自身について考える意識やその内容」と定義され、「アイデンティティ」という言葉に近いものと限定されている。

松尾はこれまで自己と他者の関係性を定着しようと数多くの作品を紆余曲折を経ながら10年以上に渡り制作してきたが、最終的な博士作品では自己と他者の関係性のネットワークの奥に、アイデンティティの基盤となるより純粋な自意識が存在しているのではないかと考えるようになる。博士論文はそうした結論に辿り着くための彷徨いの旅のような構成と内容となっている。

松尾は自分と他者の一対一の間を留めようと、自分と自分に近い存在の知人や友人を被写体に2011年から「あなたとわたし」というセルフ・ポートレイト・シリーズを写真作品として撮影してきた。そのプロセスの中で自己と他者の間に決定的な境界が存在するのではなく、そこには色彩の濃淡のような階調や段階が無数にあり、写真を撮る行為により、それらの変容や移行がイメージに刻印されることに気づいた。

そして自分と共に撮影する相手や状況、環境の変化により変幻してゆく自意識の存在を確認し、そうした実体を持たない浮遊する魂の有り様について考察するようになる。

松尾は、このように自由に変化してゆく自意識を、小説家・平野啓一郎の言う「分人主義」の視点と比較し、より明確にしようとする。つまり平野は人間にはいくつもの顔があり、相手や状況次第で様々な自分が生まれ、それらの分人各々が本当の自分であると指摘した。そこには「唯一無二の本当の自分」というのは幻想にすぎないという主張があるのだが、松尾は「唯一無二の本当の自分」という存在は否定し難く、その像を実体化するためにセルフポートレートという手法が最適であると結論づける。

博士展示作品はそうした松尾の結論を具体的に空間化したものだが、自意識を写しとるセルフポートレートによる、行き場を失ったアイデンティティの救済という切実な問題へまで踏み込もうとしている。論文自体は構成や細部記述等に難があるが、彷徨う自己を救いとうとする、セルフポートレートの現代的な実践として評価したい。以上の理由により博士号に値すると判断した。